

佐賀県立博物館・美術館報

佐賀市城内1丁目15番23号 TEL 0952(24) 3947

No.69



佐伯 祐三 裏街の広告 1927

近代洋画名作展へのいざない

京都国立近代美術館が所蔵する明治末から現代にいたる作品65点を紹介するもので、近代絵画創始期の明治から現代にかけての多彩な作家によって構成されている。その中で、明治から大正にかけての主な作品に岸田劉生の麗子像、国吉康雄のアメリカでの作品、中川紀元の新思潮の絵、前田寛治の「主觀的写実」の追求などがある。昭和に入ると洋画の日本の深まりをみることができ、小

出機重の裸婦、金山平三、小林和作の風景、坂本繁二郎、熊谷守一の精神性、藤田嗣治、長谷川潔の国際性といったものの中に日本人の感性を潜める。こうした具象絵画の流れは、山口薫、香月泰男、牛島憲之、田村一男、そして現代へと引きつながれる。

他方、シュールレアリズム、抽象絵画が大きなうねりとなって押し寄せてくる。吉原治良、山口長男、斎藤義重、宇治山哲平、難波田龍起らがそれである。

目 次	○裏街の広告	表紙
	○近代洋画名作展開催要項及び作品目録	2~3P
	○肥前の中世美術展講演会	4~7P
	○行事のお知らせ・人事異動	8 P

京都国立近代美術館所蔵

近代洋画名作展開催要項

主 催	京都国立近代美術館・佐賀県・佐賀県教育委員会・佐賀県立美術館		
会 場	佐賀県立美術館		
会 場	昭和60年5月11日(火)～6月2日(日)		
休 館 日	5月13日、20日、27日		
開館時間	9時～16時30分(入館は16時まで)		
観覧料	大人 500円 団体 400円		
	大・高生 250円 団体 150円		
	中・小生 150円 団体 100円		
	(団体は20名以上)		

主 旨

京都国立近代美術館は、昭和38年に国立近代美術館京都分館として発足して以来、洋の東西を問わず、近・現代美術の紹介に力を注ぎ、西日本における近代美術館の要としての役割を果たしてきました。また収蔵美術作品も日本画、洋画、版画、工芸など多岐にわたり、約2700点を数えるに至りました。本展では洋画の中から選りすぐった62作家65点の作品を展示します。

大正から現代に至る近代洋画の流れを、藤島武二、佐伯祐三、岸田劉生、坂本繁二郎、藤田嗣治、小出橋重、山口長男、三尾公三等の作品によりたどります。



小出 橋重 横たわる裸女(B) 1928



岸田 劉生 麗子弾絃図 1923

作品目録

作 家 名	作 品 名	制作年
あ	糸 嘴	1969
	相 笠 昌 義	1978
	麻 田 浩	1976
	足 立 源一郎	1917
	阿 部 展 也	1970
	荒 井 龍 男	c.1935
	有 馬 さとえ	1939
	石 垣 栄太郎	1925
	猪 熊 弦一郎	1965
い	Voice (Manhattan)	
う	牛 島 蕙 之	1954
お	宇治山 哲 平	1970
	大久保 作次郎	1927
	岡 田 謙 三	1973
	小野木 学	1974
か	香 月 泰 男	1958
	金 山 平 三	1945～56
	加 納 光 於	1980
	川 島 猛	1975
	発荷の旧道より	
	〈胸壁にて〉—RG	
	N. Y. 75～J. T. ～18	



坂本繁二郎 二馬図 1943



藤田 嗣治

メキシコに於けるマドレーヌ 1934



三尾 公三 回想の刻 1980

作家名		作品名	制作年
か き く	川端 実	灰色のフォルム	1974
	岸田 劉生	麗子弾絃図	1923
	国吉 康雄	鶴に餌をやる少年	1923
	熊谷 守一	化粧	1956
こ さ	小出 楠重	獅頭	1974
	小林 和作	横たわる裸女(B)	1928
	斎藤 真一	秋山	1971
	斎藤 真成	上河原の陽	1973
	斎藤 義重	人々	1955
	佐伯祐三	作品7	1960
	坂本繁二郎	裏街の廣告	1927
	里見勝蔵	放水路の雲	1927
し す	沢部清五郎	二馬図(壁画下図)	1943
	芝田米三	女	1929
	菅井波	少女像	1912
	須田国太郎	めざめる大地	1979
	曾宮一念	時速280キロ	1965
そ た	高橋秀	少女	1934
	田中善之助	鶴	1952
	田渕安一	スペインの野	1969
	田村一男	受胎告知	1970
つ と な	津田青楓	女	1911
	堂本尚郎	三相万華 IV	1972
	中川紀元	れいめい	1980
	中川直人	研究室に於ける河上肇像	1926
	鍋井克之	惑星B, R, W	1972
の は	難波田龍起	風景	1920
	野口謙蔵	白い天使	1973
	長谷川潔	月光と海水	1956
	長谷川三郎	原始象形	1958
	長谷川利行	水村雪後	1938
ひ ふ	長谷川昇	白い花瓶に挿した薔薇その他	c.1938
	平賀敬	自然	1953
	藤島武二	女	1932
	藤田嗣治	黒髪	1968
	前田寛治	H氏の優雅な生活	1972
ま み	三尾公三	花籠	1913
	三雲祥之助	メキシコに於けるマドレーヌ	1934
	三井文二	ボーランド人の姉妹	1923
	森芳雄	回想の刻	1980
	安井曾太郎	パリスの審判	1957
も や	山口薰	友達の肖像(大畑為三郎像)	1920
	山口長男	石膏のある静物	1953
	吉原治良	桃	1950
		季節の哀歌「田圃と鳥」	1953
		二つの交叉	1958
よ		作品(黒地に白円)	1968

「肥前の中世美術展」第一回講演会

「九州の中世美術と肥前」

九州大学文学部教授 平田 寛

今日は、九州の中世美術、肥前の中世美術の特質という問題を考えてみたいと思います。まず、こうした問題を考える場合には、「地域性」ということが重要になります。

現在の日本の政治・経済・文化は、中央を核として動いており、他の地域は、中央にたいして隸属的であると考えられる傾向にあります。つまり「地域性」という言葉は、中央にたいする「後進性」という語感でとらえられているということです。

しかし、こうした考え方方は今日的なものにすぎません。中世におきましては、現在のように中央集権的、或いは中央支配的な傾向にくらべると、各々の地域はより独自に運営されていたようです。

このことを九州の場合で考えてみます。南北朝時代における懷良親王の九州派遣や東福寺の再興に対する勧進など、九州の中央に対する政治的・経済的或いは文化的寄与は小さいものではありませんでした。さらに、日本は上代以来、中国との文化交流を重視しておりまして、中国大陸、朝鮮半島と一緒に水の間にあります九州は、中央にたいして、たいへん重要な位置を占めています。つまり、中世におきましては、九州の日本文化における地位は、今日よりは重かったように考えられるのです。

ただし、美術文化には技術的蓄積・伝統・伝統による洗練が必要とされますので、代々政権のあるところにみやびやかな美術文化が展開し、他の地域との間には若干の格差は生じます。

以上申しましたような事情のなかで、中世の九州・肥前の美術文化の独自性を考えなければなりません。

問題を生活に密着した形で考えますと、地域文化の独自性は把握しやすいでしょう。高麗・李朝との接触によって移入された陶芸技術はその一例で、肥前独自の展開をみせた唐津焼には、地域文化の特殊性・独自性がよく出ています。他にも、工芸や神道彫刻の領域に、ある程度の独自性が認められます。

工芸の分野では、肥前鐘と呼ばれる一群の特色ある銅鐘が、日本で六口知られており、鎌倉の領域における独自性がでています。もっとも、肥前鐘を通して肥前の独自性をいう場合には、つぎの二点に注意する必要があります。第一に、中世の鎧物師は、自由に国内を移動したと考えられていることです。第二には、銅製品は生活必需品として全国に需要がありますので、地域の独自性が

相対的に薄くなるという面があるようと思われます。

つぎに神道彫刻ですが、神々は本来、各地域に土着的に存在していますので、この領域には「地域性」がよりはっきり出ているといえます。しかし、神々は肥前のみならず、日本の各地にも存在していましたので、ここでも肥前の独自性を肥前だけで追求すると野郎自大的説におちいる危惧も生じるでしょう。

以上申しましたことから、特定領域での独自性の追求のみによって、肥前の美術文化一般の独自性を追求することは或種の難点があるということが考えられてきます。では、どうすれば肥前の独自性をあきらかにできるのでしょうか。広く中世の美術文化一般を考えておく必要があります。

そもそも中世とは、政治史的にはいいますと、武家政権の確立期、すなわち、源頼朝の鎌倉幕府開府の頃から、鎌倉政権の成立までの約四百年間をさしています。美術の歴史からいいますと、これは時代の特徴をいうのには長過ぎます。美術が基本的に仏教美術であり、公共的性をもっていた鎌倉時代・南北朝時代と、こうした公共性が薄れ、日本人が私的な美術の領域に目覚めてくる室町時代という、中世前期・中世後期の二期に分けて考える方がよいのです。

そこで、前期と後期の様相の違いを少しみてみましょう。前期には、先程申しましたように、美術は仏教美術を基本としており、したがいまして、美術はおもに公のものとして創造されていました。その点では、前期の美術は、日本人が仏教公伝以来培ってきた長い伝統というものを背に受けているといえます。中世前期はそれまでとことなるのはどの点でありますか。

それまでは、権力者が公の資財をもって美術を創らせる事ができました。ところが、朝権が貴族から武士へと変遷するのにともなって、そうしたことは次第に少くなります。資財は、一般の人々の結縁・同心・合力といった、今日的に言いますと募金という形で作り出されるようになっていきます。これが中世前期の第一の特徴です。

第二の特徴は、こうした一般の人々の結縁によって創造される美術には、必然的に即物的な理解がえられること、つまり判りやすい美術が求められるようになったということです。これは「鎌倉アリズム」と一般に称している美術の特質の根柢をなすものです。

事例をあげてみましょう。

鎌倉時代以降、ひとを極楽浄土へ導くということで盛んに信仰されます阿弥陀如来は、修行中に四十八の誓願をたて、これを達成するために五劫という氣の遠くなるような時のなかに瞑想したといいます。五劫思惟の弥陀とよぶ阿弥陀如来像の一種がありますが、その姿は五劫という長い時を表現するために、如來の髪を異常に長くのばしています。髪をみて時がわかるというわけです。

ほかにも、大和町高城寺に伝えられた木造円鑑禪師像などの頂相をふくめ、肖像美術が流行したということも、教義、經典よりは人物をとる、判りやすい即物的な当時の美術文化の志向を反映しています。

中世前期の第三の特徴は、宋・元美術、高麗美術の受容ということが挙げられます。日本文化は、中国大陸・朝鮮半島の影響のもとに変化し成熟していきます。中世もまた例外ではありません。肥前における様相については次回に菊竹先生の講義があります。

中世前期には、以上申しました三つの特徴がみられ、これらによって、中世前期美術の基本的性格がきまっていきます。

いま申しました特徴は、中世になってただちに現れたわけではありません。鎌倉時代建長年間(1249~1256)に蘭渓道隆らが来朝し、鎌倉に建長寺や円覚寺を開いて以降禅宗が流布するに従ってはっきりと強く現れてきます。

美術文化一般の話をしているのにどうして寺院が関係をもつのか、奇異に感じられた方もいらっしゃるのではないかでしょうか。当時の寺院は、現在程には宗派や儀式形態に固執していたわけではありません。様々な学習を通して人材を育成していくという面がありました。現在の学校的役割を果たしていました。したがって寺院は美術文化と共に深い関係があったのです。

さて、話をもとからえします。中世美術の特徴は、九州においては、福岡市にあります崇福寺や久留米市の善導寺など臨済宗や淨土宗・淨土真宗の寺院で創られる美術に、顕著となっていきます。

肥前の地におきましては、臨済宗の寺院で新しい時代の美術が創造され、肥前の中世美術の様相を形づくっていきました。臨済宗寺院である前述しました大和町高城寺の木造円鑑禪師坐像、武雄市広福護国禪寺本尊の木造釈迦如来坐像および木造四天王立像などは、こうした傾向のもとで成立した作品です。

しかし、九州・肥前に現存する美術の現実から申しますと、旧仏教系の寺院に優れたものが多く残っています。

肥前の例ですと、13世紀半ばの優れた絹本着色両界曼荼羅をつたえる多久市の妙覺寺や、安阿弥様の木造阿弥陀如来立像がのこる小城町見明寺は天台宗です。他にも、運慶様の木造釈迦如来坐像を本尊とする三田川町東妙寺、あるいは康俊作木造普賢延命菩薩騎象像の佐賀市竜田寺、南北朝時代の非常に珍しい板繪金剛界種字曼荼羅をつたえる三田川町石塔院は律宗です。こうした例はいくつも挙げることができます。

そういう事情のもとで、肥前の場合は、臨済宗寺院に多くの美術がつたえられていることを先程ちょっと申しました。しかし、よくみてみると、肥前の臨済宗寺院のなかでは、東福寺系が多いのに気がつきます。

東福寺は、京都にある臨済宗寺院のなかでは、東福寺派の本山です。東福寺の開基である藤原道家は伝統文化

の理解者であり、東福寺の創建にあたっては、奈良の東大寺、興福寺創建と同じ精神をもって行ったという事情がございます。したがいまして、東福寺系の寺院は、旧仏教のもつ伝統的な美術文化とつながりは強かったのです。肥前の中世前期における高い美術作品を生み出した背景はそこにあるといえるのではないかでしょうか。肥前の中世前期のすぐれた美術は、伝統的文化と深い連関があるということによって一つの特質をつくっているといえるのではないでしょうか。

つぎに中世後期について考えてみましょう。

この時期は、旧仏教や伝統的美術文化と鎌倉新仏教以後の文化が混然として、日本の文化の正統性、日本美術の正統性がどこにあるのか、見極めがしつぶくなっています。たしかに、室町時代の前期には、質素で幽玄な境地を特色とする武士的・禅宗的な東山文化が成立します。しかし、東山文化が全国にわたって強い影響を及ぼしたことは考え難いのです。その反面、地方的美術が様々に展開します。ここでいう「地方」的とは、停滞的であって、上等な作品は作られなくなるといった今日的な語感をもっています。

ただし、この時期になりますと、仏師や絵師の名前が判明する例も多く、作者間の連関もある程度考えることができます。しかし、今も申しましたように美術品の性質としては、停滞的になっています。

神道美術や工芸の分野にそうした傾向は現れやすく、従前の豪華絢爛・鋭敏繊細とは程遠いが、ひじょうに親しみやすい美術が多く創られるようになっていきます。しかし、それは創造的美術の面というより、ひととの生活文化の面で語られるべき性質のものになっているのです。美術の歴史からみての中世の終末といえるのです。

(昭和60年2月2日 於佐賀県立美術館研修室)

(→7P右下より続く)

例えば、朝鮮鐘が肥前に伝えられていますが、筑前芦屋の鉄物師大江貞家による対馬嚴原測候所の銅鐘のような朝鮮鐘の模倣は、肥前では行われていません。そうした影響を受けずに、肥前には、和鐘の伝統を受け継ぎながらも肥前らしさを出した肥前鐘と呼ばれる独特の鐘があります。

つまり、肥前の美術は、中世には既に肥前独特のかたちが形成されていたわけです。のために、中国大陸や朝鮮半島から優れた作品がもたらされても、その影響をたやすく受けけて肥前の美術が変化することはなかったのです。

請来品の価値を認め、それを後世に伝えるべく様々な保護を加えるが、その影響は受けないという肥前の伝統的頑固さ、これが他の地域にみられない、肥前の美術の特質であるといえると思います。

(昭和60年2月16日 於佐賀県立美術館研修室)

「肥前の中世美術展」第二回講演会

「請來作品を通してみた 肥前の仏教美術」

九州大学文学部助教授 菊竹 淳一

今日は、日本以外の場所から一とりわけ朝鮮半島の高麗時代に一日本へ伝えられた美術作品を通して、肥前の仏教の美術がどのような特質をもっているかを考えてみたいと思います。

まず、肥前の地理的位置についてみてみましょう。

肥前一たとえば佐賀市一を中心とし、東京までの距離を半径として円を描いてみると、どのような地域がその円形の中に含まれるでしょうか。朝鮮半島は殆ど含まれます。それから中国山東省の一部、それに南海諸島の一部さえもこの円形内に入ります。

こうしてみると、東京に対すると同様に中国大陆や朝鮮半島にも我々はさまざまな意味で注目する必要があるといえるでしょう。

ところで、肥前を含めて北九州に伝えられている種々の文化的な遺産の中には、中国大陆や朝鮮半島からもたらされたものが、他の地域に比べ圧倒的に多く含まれています。このことは、当時の肥前・北九州の人々が、中国大陆や朝鮮半島に大きな興味を懷き、中国大陆や朝鮮半島と文化的に密接な関係を保っていたということを示唆しているのではないかでしょうか。

ところで、朝鮮半島から肥前にもたらされた美術作品は、どのようにして伝えられ、肥前の人々がどのように考えていたかをみれば、肥前の美術の一つの特質を考察する大きな手掛かりになります。

朝鮮半島から肥前にもたらされた彫刻は、高麗時代の仏像に優れたものが多くみられます。現在、半等身以上の大きさをもつ高麗時代の金銅仏は、約40件が日本に伝存しています。その内訳は、北九州についてあげてみると長崎県が22件と最も多く、とりわけ対馬に17件と集中し、その他に壱岐3件、北松浦郡鷹島、松浦市に各1件が残っています。次いで、佐賀県・福岡県に各々2件、熊本県玉名市・大分県宇佐市などに1件ずつが知られています。いかに北九州に多くの高麗仏が伝えられているかがお判りいただけると思います。こうした北九州に伝えられている多くの高麗時代の金銅仏から、現段階では、その作風を五つのグループに分けることができます。

第一のグループは、対馬の厳原町久根浜・大興寺にある等身に近い銅造迦陵迦如来坐像にみられるような、高麗時代初めに流行した鉄仏の系譜を引く豪放な作風のものです。第二のグループは、すんなりとした体軸や豊かな

装飾性を特徴とするもので、鹿島市普明寺の銅造菩薩形坐像は、このグループの中にあって、美術的にも優れた作品です。この像と造形的に類似した作品は、対馬豊玉町小綱の觀音寺にある銅造觀音菩薩坐像で、天暦3年(1330)に、韓国の忠清道の浮石寺で戒真ら30人の人々の勧進により造像したものであることが像内納入文書から判ります。瓔珞の表現法や腹前の飾り、衣の纏い方、腕輪やイヤリングの表現など、細部にいたるまで觀音寺像と普明寺像は類似しており、この二つの像が接近した地方で、14世紀前半に作られたものだと考えられます。第三のグループは、第二のグループと類似しながらも、顔や指にやや丸みをみせる作風をもつ一群です。これには対馬峰町佐賀の円通寺の銅造菩薩師如来坐像や、対馬上県町志多留積迦堂の銅造如来形坐像などが属しています。第四は、壱岐郷ノ浦町物部本村の金谷寺蔵の銅造菩薩形坐像に代表されるグループで、顔が卵形で、頬骨が高く、体軸が細身で、指先が尖っており、他のグループとは別系統の作風と考えられます。鷗島町原免の釈迦堂の銅造如来形坐像や熊本県玉名市の大覚寺にある銅造如来形坐像などがこのグループに入ります。最後のグループは、のっぺりと生々しい印象を与える顔面を特徴とする一群です。高麗時代に流行したラマ教の影響を受けたのではないかと想像されますが、これには、対馬峰村吉田の普光寺の銅造如来形坐像や松浦市星賀町岳崎免の金泉寺の銅造如来形坐像などが含まれます。これらのさまざまな作風をもつ高麗仏の中で、鹿島市普明寺の銅造菩薩形坐像は造形的に極めて優れた作品であると思います。

絵画の領域では、高麗仏画に優れたものが多くみられます。その中でも唐津市鏡神社の絹本着色楊柳觀音像は、大きさ、作風とも非常に優れ、現存する高麗仏画の中では屈指のもの一つです。幸いこの仏画については、伊能忠敬が書き残した『測量日記』文化9年(1812)9月7日の条から、大きさ、作者や施主そして伝来の事情などを知ることができます。そして、その作風から当時の高麗宮廷の一級の作家たちによって描かれたものであることが考えられます。ところで、唐時代に張彦遠が著した『歴代名画記』という画論書には、唐時代の画家周昉が水月觀音像の図像を創作したとあります。また、朱景玄の『唐朝名画錄』には、貞元末年(804)ごろに、新羅人が周昉の作品を江蘇や安徽省などの土地で高価で購つたと記録しています。水月觀音像は、別に楊柳觀音像とされ、これらの記述によって朝鮮半島で楊柳觀音像が好まれていたことが考えられます。それゆえ、優れた作風をもつ、鏡神社の楊柳觀音像から、逆に唐代絵画の素晴らしいが類推され、たいへん興味深いことです。こうした東アジアの絵画史上注目に値する高麗仏画が肥前には伝存しているのです。

書籍の分野でも、高麗時代の装飾絵に見るべきものが肥前にあります。『高麗史』の文宗31年(1077)3月4日

には、国王が興王寺で新完成の華厳經を祈福のために読ませたとあります。このほかにも高麗國では、肅宗6年(1101)4月18日、翌肅宗7年5月12日、毅宗10年(1156)4月23日にも国王の命による写経が行われています。そして12世紀末には写経院が作られ、国家的規模で色々な装飾経がつくられています。そして、肥前の地には、驚くほど保存のよい紺紙金字法華經が伝えられています。それは、鍋島報效会の紺紙金字妙法蓮華經六帖です。

工芸品として日本には71口の朝鮮鐘があったといわれ、47口の現存が確認されています。その中で北九州には、長崎に5口、佐賀に4口、福岡に6口、大分に1口があつたといわれています。県内では、唐津市鏡の恵日寺に残る銅鐘が大平6年(1026)9月に鋳造されたもので、全国で9番目に古い在銘の高麗鐘です。この梵鐘とほぼ同型のものが、唐津の勝楽寺にあつたと伝えられています。肥前に高麗鐘の名鐘がいくつかあつたことがわかります。

以上、肥前にのこる仏教の美術を仏宝・法宝・僧宝の三宝を分けてお話ししました。

三宝については、唐時代の糸道世撰『法苑珠林』の中で、『金檀銅素、漆綿丹青ノ圖像聖容ヲ仏宝ト名ヅケ。紙綱竹帛ニ玄言ヲ書写シ法寶ト名ヅケ。剃髮染衣ノ執持品ヲ僧宝ト名ヅケ。』と記しています。すなわち、仏宝とは、仏像や仏画のことで、法宝とは糸迦の教えを書きとどめた經典にあたります。そして僧宝は、僧侶が所持し日常生活に用いる工芸品に相当するといえるでしょう。

さて、先程申しましたように、肥前には仏・法・僧の三宝が満遍なくもたらされ、伝えられています。他の地域でもそうかといいますと、一概にそうとはいえないようです。例えば、対馬・壱岐には仏像は多くみられますが、仏画が伝えられておりませんし、筑前には仏像の優品が伝えられていません。

肥前には三宝がバランスよく伝えられて保存され、しかも、それぞれに優秀な作品がみられるることは、肥前の人々の文化財を愛する心、見る目があつたということを意味するのではないかでしょうか。

肥前の人々には、ある面で自らは優れたものを創り出しができなかつたが、創り出されたものの価値を認め、それを永い時期にわたって保存することにかけた人々であるということがいえるのではないかでしょうか。

たしかに、肥前には、彫刻・絵画・書籍・工芸に亘り、高麗美術史上注目すべき優れた作品がもたらされています。こうした美術は、從来言われてきたように、倭寇などの強奪によって高麗から請來されたのでしょうか。『明月記』には松浦党による強奪の記述があり、「吾妻鏡」には松浦鏡神社の住人が高麗から珍宝類を強奪したと記録するなど、肥前松浦党が倭寇に大きな比重を占めています。しかし、こうした倭寇は「高麗史」や「倭寇実錄」にみると、米人ととの強奪を中心に行っており、仏像や仏画などの掠奪の記録は殆どありません。一方、倭寇

の活動に困窮した高麗や李氏王朝は、日本へ倭寇の領圧を申し入れますが、日本は交換条件として大藏經の請來を希望しています。例えば、1389年から1539年の150年間に高麗版大藏經請來は要求だけでも83回に及んでおり、1395年には今川貞世が2部入手しています。こうした依頼者の中には、大内氏や波川氏や宗氏や呼子氏などをはじめ九州の豪族が多く含まれており、1445年には肥前呼子氏が1部入手することに成功しています。こうした交易は『李朝實錄』からも確認することができます。例えば、李朝の太祖・定宗・太宗の時代、1393年から1418年には、日本全体で62件の正式依頼が記録されていますが、その中では壱岐を含めた肥前が27件で全体の43.6%を占めています。世宗時代の1419年から1450年ではやや様相が変わりますが、それでも93件中24件で全体の25.8%を占めています。

そして、こうした交易の中では、李朝時代の庵宣興儒政策で仏像や經典などが貿易の対象品となり日本へ伝えられたことも考えることができます。そのではないでしょうか。

一方、朝鮮半島に現存する高麗美術が少ないのはなぜでしょうか。これには、北方の外敵の脅威が大きく影響していると考えられます。その侵略は契丹にはじまり女真や金と続き、特に高宗18年(1231)以降約30年に亘る蒙古の蹂躪は激しく、高麗の国土を荒らし、朝鮮半島の文化財の殆どはこの時に破壊されてしまったと考えられます。

つまり、肥前への高麗美術の請來は、仏教弾圧政策と交易活動の結果によるものです。そして、肥前の人々は美術鑑識眼をもって作品を選択し、美術愛好心をもって良いものをいまに伝えてきています。

さて、日本は昔から優れたものを持たなかった国であり、『持てる国』、『持てる者』から優れたものを移入し、常に自らのものに化育し、保存するという順應性に富んでいたといえます。それが日本美術の表現と伝統において、『持てる国』のたとえば中国大陆や朝鮮半島とは異なる含蓄性のある美術的特色を示しています。しかも、日本美術の歴史をみてみると、中国大陆や朝鮮半島の作品が日本へ入ると、そこからある特色を日本美術の中にもたらそうとしています。

ところが、肥前の場合、非常に優れた美術作品、とくに高麗の仏教の美術がありながら、その影響を受けて肥前の仏教の美術が新しい展開を示したかといいますと、そういうものはみられないよう思います。

中世に、朝鮮半島から優れた仏教の美術作品が肥前の地にもたらされ、現在にまで優れたものを残していることから、美術の鑑識眼と愛好心は確かに肥前の人々に備わっていたと考えられます。請来品の評価を正しく行なながらも、それに惑わされないだけの肥前古来の文化的豊かさがあつたと考えられます。

(5P右下へ続く→)

行事のお知らせ（昭和60年度）

常設展

展覧会名	会期	観覧料	会場
佐賀県の歴史と文化展	4月1日～3月31日	大人 200(150) 大・高生 150(100)	博物館
近代の美術・工芸	4月1日～3月31日		美術館

企画展

展覧会名	会期	会場	展覧会名	会期	会場
近代洋画名作展	5月11日～6月2日	美術館	昭和60年度日本芸術院美術展	9月20日～10月13日	美術館
第68回佐賀美術協会展	6月8日～6月16日	美術館	第5回よみがえれ佐賀展	9月28日～10月6日	博物館
第10回佐賀県書作家協会展	6月19日～6月23日	美術館	農協共済小中学生ポスター・書道展	10月16日～10月20日	美術館
第2回佐賀県写真協会展	7月10日～7月14日	美術館	第35回佐賀県美術展	11月1日～11月10日	博物館
第6回二科会佐賀支部展	7月17日～7月21日	美術館	第9回佐賀県高等学校芸術祭	11月16日～11月24日	博物館
独立C・S展	7月24日～7月28日	美術館	第26回佐賀県学童美術展	11月27日～12月1日	美術館
武雄市絵画クラブ10周年記念 佐賀展	7月31日～8月4日	美術館	第5回九州二科会写真部公募展	11月27日～12月1日	美術館
第34回綠光会会展	8月7日～8月11日	美術館	第9回エマ会会展	12月11日～12月15日	美術館
第5回日韓文化交流展	8月14日～8月18日	美術館	第6回佐賀新聞学生書道展	12月18日～12月22日	美術館
蒼海・梧竹展	8月21日～9月1日	美術館	さが行動会	1月22日～1月26日	美術館
第13回七夕書道展	8月21日～8月25日	美術館	第8回二紀佐賀グループ展	1月29日～2月2日	美術館
EVENT '85	8月28日～9月1日	美術館	第31回書初書道展	2月5日～2月9日	美術館
第17回佐賀県勤労者美術展	9月4日～9月8日	美術館	古代史発掘展	2月8日～3月2日	博物館
第16回九州新工芸展	9月7日～9月16日	美術館	佐賀大学教育学部美術工芸科 卒業制作展	2月19日～2月23日	美術館
第35回佐賀県児童生徒理科 作品展	9月13日～9月20日	博物館	第15回九州グラフィック デザイン展	2月26日～3月2日	美術館
			佐賀県現代美術展	3月8日～3月30日	美術館

人事異動

○退職（昭和60年3月31日付）

副館長 西村正剛

// 手塚静雄

○転入（昭和60年4月1日付）

副館長 神宮忠義（黒髪少年自然の家より）

学芸課長（企画普及係長事務取扱）

小宮睦之（佐賀北高等学校より）

主査（学芸員）宮原香苗（九州陶磁文化館より）

主事（学芸員補）田中 裕（唐津北高等学校より）

主事 大島暁夫（佐賀芸術高等学校より）

○新採

主事（学芸員）山崎和文

○転出（昭和60年4月1日付）

学芸課長 尾形善郎（文化課長補佐へ）

企画普及係長 志佐憲彦（平山小学校へ）

主事（学芸員補）宇治 章（九州陶磁文化館へ）

主事 森永 茂（多久工業高等学校へ）

主事 中島保生（図書館へ）

博物館・美術館報 第69号

発行年月日 昭和60年5月11日

編集 大塚 正道

発行 佐賀市城内1丁目15番23号

佐賀県立博物館

佐賀県立美術館

印刷 (有)大同印刷